



■開館時間／午前9時30分～午後3時30分
■開館日／毎月1日と土・日曜・祝日及び1月1日～5日
■拝観料／大人 200円 小人 100円(高校生以下)
※団体割引(30人以上) 大人150円 小人70円



■交通機関

- ・JR三輪駅より徒歩5分
- ・桜井駅(JR・近鉄)よりバス、「三輪明神」下車 徒歩10分
- ・土・日・祝日 桜井駅より大神神社へバス運行あり
- ・西名阪自動車道 天理インターより車で20分

大神神社社務所

Tel 0633-8538 奈良県桜井市三輪1422
TEL 0744(42)6633 FAX 0744(42)0381
<http://www.oomiwa.or.jp/>

三輪明神 大神神社 宝物収蔵庫



三輪山絵図（室町時代）

古代祭祀関係の出土品

さ い かわ の ほとり

三輪山麓・狭井河之上出土

狭井神社の北西、神武天皇聖蹟碑の南方、狭井川付近より出土。滑石製模造品（双孔円盤・臼玉）、須恵器、土師器などがあり、奥垣内祭祀遺跡とよばれる。

時に須恵器は、最も発展した6世紀のものが大半で、中に初期にあたる5世紀の古代須恵器も含まれることから、三輪の地に早い時期に搬入されていたと考えられる。古く神託により、当社の祭主になられた神孫大田根子命の出生地は、須恵器生産地の和泉国陶邑であり、この地より三輪の大神に供されたものと思われる。



よこ
横瓶 ▲
高25.5cm、口縁部径12.6cm、
胴幅36.1cm



たかつき
高杯 ▲
高20.5cm、
口縁部径29cm



はな
腹
高14.6cm、
口縁部径12.6cm、
胴幅9.5cm



だいつきちょうけいこ
台付長颈壺
高31.7cm、
口径10.2cm、
胴幅16.8cm



てい
提瓶 ▶
高27cm、
口縁部径8.1cm、
胴幅23.5cm



いとうしょんだんじく
周書断簡（重要文化財）

紙本墨書き。楊忠伝逸文上・下及び王雄伝逸文とを一巻に貼り合わす。

いずれも平安時代初期の写と推定される古鉢本である。

大正12年(1923)、大直禰子神社（旧神宮寺、大御輪寺）の社殿の屋根裏から発見された大変貴重なものである。

神宮下賜の御神宝

伊勢の神宮においては、20年毎に、御社殿の御造営をはじめ御神宝御装束類など、すべてのものを新調し、大御神のお遷りを願う式年の御遷宮が斎行される。これは我が国生成の原点にたちかえり、悠久なる国家生命の更新を祈る民族の願いがこめられた最も重要な儀式である。その際の御神宝（昭和4年御奉製、昭和29年御撤下）を伊勢と三輪との御神縁により昭和45年に賜る。

おんがめ
御鏡（伊雑宮御装束）壱面
円形。径15.1センチの白銅鏡。
和鏡。草花双鳥文で、表面と縁は水銀磨き上げで古來の方法が採られている。
付輻轂管・大帷



おんくしげ
御櫛筒（風日御宮御装束）壱合
覆蓋造で黒漆塗の銀平文装。平文は漆工技法による名称で、正倉院の宝物にも数多くみられ、御料はこの薄板に銀を用いているから銀平文といいう。附櫛・袋



茶碗 銘「三輪」
第10代人間国宝 三輪休和作

三輪休和氏は、明治28年旧萩窯御用窯三輪家9代雪堂の二男として生れ、昭和2年に10代休雪を襲いて以来、萩焼の源流である高麗茶碗の研鑽に努め、その和風化に独自の作風を樹立、隠居して休和と号した。昭和45年には人間国宝に認定され、近世から出発した萩窯窯を瀬戸、美濃、備前等の古窯のレベルまでに引き上げた。当神社に対する信仰は殊の外篤く、自ら窯の傍に三輪神祠を祀り、御神護のもと、茶陶の世界に新風を吹き込んだ。昭和43年奉納。

神宮寺関係文書

三輪山縁起

中世に入ると神仏習合思想により、各社寺は自己の興隆の為に、盛んに由来・靈験を現わす縁起類を作成した。当社のものは天文20年(1551)卯月19日の奥書があり、内容は、三輪



明神は三世常遍の靈神とし、その鎮座する三輪山は常住不変の宝山と説いて、当社と天照大御神を祀る伊勢との本述関係や、三輪明神は大黒天神として表現、日吉山王と同体などと述べている。

平等寺勧進帳

鎌倉時代に、慶円(1140-?) - 1223)が真言灌頂の道場として開いた三輪別所に寺を発するのか平等寺である。次第に隆盛をきわめて大御輪寺に代わって、大神社神宮寺になった。



古絵図によれば、境内には慶円の像を安置した開山堂、本堂、医王院、不動堂などが見え、その不動堂護摩所の葺替えの為に、勤行僧の華眼が、各方面の篤信家に厚助を勧進している。文明8年(1476)6月日、光明院隆憲僧正御筆也と奥書にある。

大般若經

長さ25センチ、幅7センチの折本仕立、600巻。8世紀初、唐より渡来した大般若經は、当時の仏教奨励により、各地の国分寺や寺院において読誦されると共に、次第に転写の法要が抜かり転写された。当社においても神宮寺大神寺の社僧の勤行もあってこれらが転写されたのである。所蔵の写経は往昔、禁足地内の経蔵に収められたもので各巻末尾には、「大三輪社」の記があり、その内、巻392に元永3年(1120)、巻552(欠本)に文治6年(1190)の添書きがある。平安時代中期から鎌倉時代初期にかけて書写されたものと思われる。また古くからは巻子本であったのを慶安年間に折本に改めたことが判明している。



禁足地出土

三輪山は、千古斧鉄をいれぬ神山であり、特に、拜殿東方、三ツ鳥居奥の禁足地は、往古より絶対不可侵の靈城として、尊崇護持されてきた。それゆえに、子持勾玉をはじめ、滑石製模造品(勾玉・白玉)、土師器、須恵器など、社蔵の出土品については偶然の機会に発見されたものばかりである。祭祀遺蹟として最も神聖な当三輪山内の禁足地から出た子持勾玉は、祭祀用品であったことは勿論、信仰の上からもある呪力をもつもの。親の玉が子の玉を生じて増加するという多産増福の意義をふくむ神秘の象徴とされ、特に祈願を行った上で埋葬されたものであろう。



▲杯
高10cm、口縁部径7.5cm



▲埴
高4.2cm、口縁部径4.2cm



▲子持勾玉
長11.5cm



▲滑石製模造品

山の神出土

山の神祭祀遺蹟は、狹井神社より東北方の山林傾斜地にある。大正7年、露出していた巨石の下とその周辺より大量に出土した。

三輪山の辺津磐座の一つであり、出土品は素文鏡・曲玉・滑石製模造品・土製模造品・須恵器・鉄片など祭祀に関するものばかりであり、磐座祭祀の場と考えられている。



これらは古代において、大三輪神に神酒を供え、また造酒の神徳にちなんで、それらの道具を土製模造品でつくり、献げられたものとされる。

伝世の神宝類

おおくにめのむかみもくそう
大国主大木造（県指定文化財）

古米より御神像として伝わる。高さ69センチ。
立像、カヤー木造。平安時代後期の作。
鳥帽子を冠り、右手は腰に手印を結び、素足。
衣は筒袖で裾の短い袴を付ける。すなわち奈良朝文官の官服であった白丁に近い。左手に大刀を持ち、背より肩にかける。

一般に神像造立は、平安時代に仏教文化の影響により始まったと解される。神仏習合の思想から大国主神と大黒天（摩訶迦羅天）は同体とされ、当社所蔵『三輪山縁起』にも三輪明神が大黒天の形で影响したという記事がある。



朱漆金銅装楯（重要文化財）

一双二枚木造装楯、表上部に金銅伏金、裏上部鉄製打立金。長158センチ、巾39センチ、表朱塗裏黒塗。表上部に日像を画くもの一枚と、月像を画くもの一枚。
各々の裏面に「大神八所大明神 嘉元参年（1305）乙巳卯月一日」の朱漆銘がある。

銘にしるす大神八所大明神は、本社の大宮をはじめ日向・狹井・桧原・神宝・天皇・大行事・活日・貴船・神御前・若宮など各攝末社の祭神をも含めての総称であろう。



たかつさ
高杯（県指定文化財）

現在の大祭に献供の大杯の原型と見られる。方38センチ。高さ33センチ。櫛材・黒漆塗。
底裏の「大神社 延元3年（1338）5月 大施主道有」と朱塗の銘文がある。

こてつきとう
古鉄鏡（伝世の御神鏡）

鉄製。径19センチ。鏡背に連絡草体に似た、また一種の咒符的な表現の文字が見られる。「美和」と読むべきものと考えられ、この文字は当社の旧一ノ鳥居額文と同じで、この神鏡と同意匠を示すことが観察される。



神鏡は上古のものと見られ、鎌倉末（元豊記）にこの額の記事がある。箱書に「明治7年（1874）再改新調箱、本国之固有古鉄鏡、大和高宮と胤（花押）所蔵」とあるところからも、大神神主が奉護伝世の神器と重んじてきたもの。

（写真は模造品より）

こしゃうよう
湖州鏡（県指定文化財）

径11.4センチ、表面は蓮弁台座に坐した聖観音の御影を毛彫にしてあり、背面には「湖州真石家念二叔照子」の銘が陽鋲している。湖州鏡はその名の如く、中国浙江省の湖州で作りはじめられ、わが国へは平安時代後期より鎌倉時代にわたって渡来。これもこの時代に属するもの。



ないこう か もんこう
内行花文鏡

径23.2センチ。大型の鏡で、鏡面の反りは少なく、平直に近い。四葉文の鉢座を入れ、その間に「長宜子孫」の銘を配する。鋲上りもよく、中国・後漢時代初期につくられた舶載鏡。

鏡向古墳群にあり、初期の築造とされるホケノ山古墳出土と伝えている。



ほうらいさん す きょう
蓬萊山図鏡

銅製。径11.5センチ。鎌倉時代末頃の作と推考される。中国神仙の思想より、東海に蓬萊山という神山ありと伝えられ、不老不死の思想とともに画題になっている。



まついくづるもんこう
松鶴鸞文鏡

銅製。径11.6センチ。翠を替えぬ松と千年を寿ぐ鶴との目出たい組み合わせで、和鏡の中でも平安・鎌倉時代に特色がある。当社のものは鎌倉時代末頃の作。

